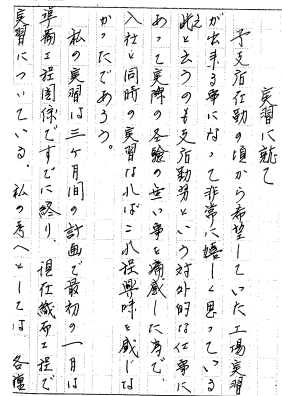


とにかく阿部株式会社にはお世話になった、その気持ちは終生忘れられん

岩田商事(株)倒産後、中谷稔氏は、1954年8月に大月勤氏の斡旋で阿部(株)大阪支店に入社した。当時、社長を務めていたのは阿部和男氏である。中央区備後町の大阪支店事務所の2階に寝泊まりしながら、毎日朝の5時から夜の8時まで事務処理をおこなった。そして、備後町から天保山の船着き場まで自転車で出かけるのが日課で、今治から届く荷物の伝票をとりにいき、取引先の問屋まで届けた。

入社3年目の1957年5月から3カ月間、今治の織物工場と染晒工場に実習にいったことがある。タオル製造の現場を知るため、みずから志願したものだ。そのときの心情を「実習に就て」に記している。

予支店在勤の頃から希望していた工場実習が出来る事になって非常に嬉しく思っている。之と云うのも支店勤務という対外的な仕事にあって実際の経験の無い事を痛感した為で、入社と同時の実習なればこれ程興味を感じなかったであろう。

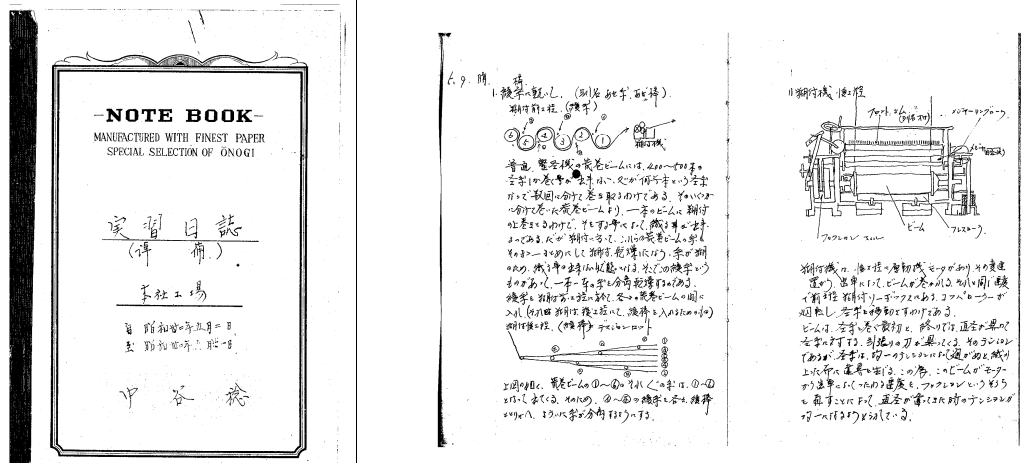


「実習に就て」



(中谷稔氏提供)

実習先では、以前東洋紡の工場では技術者として仕事をしてきた人が阿部(株)の工場長をしており、機械の動かし方など指導してもらった。学んだこと、気付いたことを毎日欠かさず「実習日記」に記録し、工場長に目をとおしてもらった。そのときの日記は、いまでも大切に保管されている。実習日記には、おもに原糸加工や染晒加工などの準備工程について細かく記録されてある。本社工場での実

習は、中谷氏にとって日々発見の連続であり、多忙だったが充実していた。



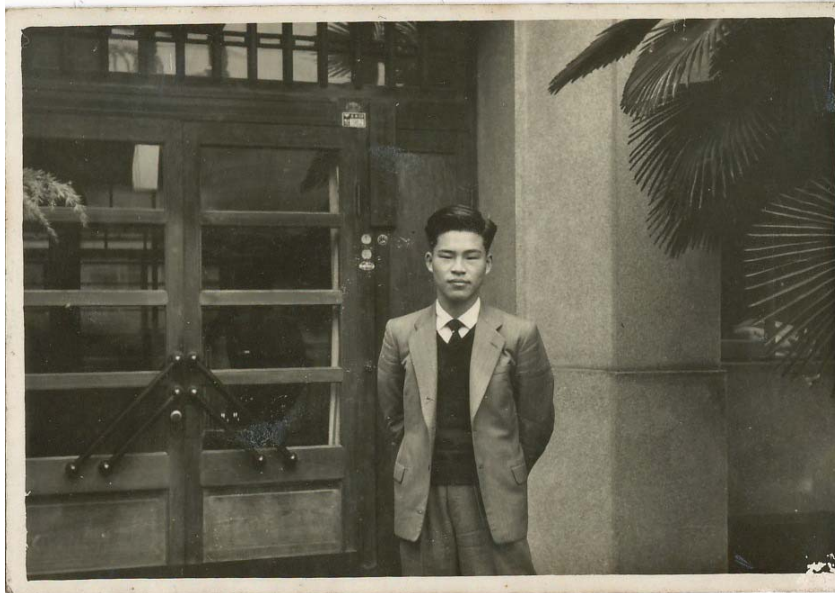
「実習日記」
(中谷稔氏提供)

タオル製造の基礎を身に付けて大阪に戻ってからも、会社がとり組む事業や方針に沿って、中谷氏は自分にできることを何でもした。1959年に工場設備の近代化に伴って東洋紡績山田工場  に自動織機 80 台をとりにいき、自社工場にあった力織機 ^{りきしよつき} と入れ替える段取りを付けたり、1960年に手捺染によるタオル製造を開始するために、まず綿織物用織機をタオル用に改造するための鋳物工場「今治鋳造(株)」を社内に設立し、そこに京都から手捺染の技術者を招へいしたり、1960年代のタオルブームが訪れると(株)林タオル  などのタオル専門問屋や三菱商事などの大手商社に売り込みをかけた。通信販売大手の千趣会との提携で月賦販売をはじめたり、いろいろなことを経験した。

多忙な日々を送りながらも、プライベートでは 1963年4月に結婚し所帯をもった。妻の幸子氏は、今治の出身で、カトリック系の東京保育専門学校を卒業した才媛であり、キリスト教徒でもある。大学を卒業後、しばらく東京で働いていたが、結婚して大阪にやっ

てきた。中谷氏は、長年寝泊まりしていた事務所の2階から吹田市の団地に引っ越し、幸子氏と新しい生活をはじめた。

長い大阪での生活に終止符が打たれたのは、綿織物の売れ行きが頭打ちとなり、公害問題で本社の染晒・織物工場を東予市三芳に移設した直後であった。なんとか会社の立て直しを図る必要があり、社長の阿部和男氏に呼ばれて1972年に今治の本社へ移動となった。こうして、通算で18年におよんだ大阪支店時代に別れを告げ、帰京した。



阿部(株)大阪支店入社時の写真

(写真：中谷稔氏提供)

実のところ、このとき中谷氏は、長年営業畑で培った勘で、織物の先行きに不安を抱えており、これを機にどこかへ転職しようかとも考えていた。でも、「とにかく阿部(株)にはお世話になった、その気持ちは終生忘れられん」と、おもい止まった。すでに定年退職して故郷の岡山に帰省していた大月氏にも、身の振り方について相談した。そうすると大月氏はこう言った。「何とかやってくれんか。他にやれる人がいないから、君以外に頼れる人がいない。たいへんだとおもうけど今治に帰ってくれ。」大月氏の一言は、中谷氏にと

って重みがある。人生のすべてに係わってきた人物だからだ。そして、1972年に本社勤務となり、おもにタオルの販売に従事しながら、経理業務全般を担当することになった。



阿部株式会社の商標


写真：宮崎陽平氏提供（みやざきタオル）



今治本社勤務時代

（写真：中谷稔氏提供）

4. 阿部(株)の危機と現役引退

阿部(株)は、阿部平助が1896年に創業した阿部合同会社を前身にもつ。今治で最初にタオル製造をはじめた会社だが、1916年に広幅綿織物と綿ネル生産に特化し、タオルの生産をいったん中止した。第二次世界大戦中は軍服用の綿織物を生産し、戦後は東南アジアを中心に広幅綿織物の輸出を拡大していった。阿部(株)は、染晒と製織を一貫しておこない、織物工場を現在の今治城の近くに5,000坪くらい所有していた。また、染晒工場を現在の今治国際ホテルのあるところに、これも5,000坪程度の広さで構えていた。戦後復興から1950年代にかけては、「ガチャ万、コラ千」の時代で、繊維産業に未曾有の好景気が訪れ、阿部(株)の成長を後押し

した。

その実、中谷氏は、中高校時代の新聞配達のアルバイトの他に、阿部(株)で時々アルバイトをしていた。おもに、銅版に絵柄が掘られたロールでプリントする作業を手伝った。ちょうど戦後復興期の頃である。

1960年、阿部(株)は、綿織物用の織機をタオル用に改造してタオル製造を再開した。当時の今治では、先晒のジャカード織のタオルが主流であったが、阿部(株)は手捺染によるプリントタオルの生産をはじめた。京都から技術者を呼んで手捺染によって柄を出し、他のタオルメーカーとの差別化を図った。機械による捺染もおこない、その後他のメーカーでも後工程において捺染加工を施すようになっていった。




三芳工場の外観（左）と作業場内の様子（右）

（写真：中谷稔氏提供）

1960年代末になると、市内の騒音問題や公害問題に直面し、阿部(株)は1970年に東予市三芳に15,000坪の土地に織物工場13,500坪とタオル工場1,500坪を併設した大工場を建設した（新工場での操業は1972年）。工場を一新してより一層の成長を目指そうとした矢先、不運なことに繊維不況が日本を襲った。阿部(株)が主力としていた綿織物の輸出が滞るようになり、これ以降会社の経

営は苦境に立たされることになる。1980年、経営陣と銀行との間で話し合いがもたれ、和議を申請して整理に入った。しかし、このとき労働争議が起こり、同年11月から12月末における労使間協議の末、退職金5割減額での支払いで合意に達した。

タオル製造やタオル捺染において先陣を切って今治のタオル業界に新しいものを導入し、戦後は綿織物の輸出で一財産を築いてきた老舗企業の経営が傾いたのは、繊維産業自体が斜陽産業になっていったという時代の趨勢もあるが、しかし、いちど築き上げた財産を維持、あるいはそれ以上に昇華させることの経営上の難しさは、今も昔もどんな商売だろうが変わらない。戦後日本の代表的な企業家である松下幸之助  が「企業は人なり」と言ったように、組織は人で成り立っており、会社を潰すも生かすも人、経営者にかかっている。



三芳工場内の様子

（写真：中谷稔氏提供）

その後、阿部(株)が1980年に旭染織(株)を親会社にもつトウヨテリー(株)にタオル部門を引き渡した経緯、1983年に今治造船(株)傘下の今治産業(株)に染晒工場の敷地5,000坪と43億円の債務を譲り渡した経緯、そしてそこに銀行の思惑が複雑に絡み合い、阿部(株)の解散劇において、ここでは語り尽くせない人間ドラマがあった。

（次号につづく）